

学 位 論 文 題 名

「台湾の少女」の誕生

－ 日本統治期の台湾人作家黄氏鳳姿に関する研究 －

学位論文内容の要旨

本論文は、日本統治期の台湾において「台湾の少女」「台湾の豊田正子」と称えられた黄氏鳳姿（1928～）の誕生とその作品をめぐる受容と評価を、さまざまな植民地主義的言説との関わりにおいて究明しようとした論である。台湾の文学少女黄氏鳳姿の誕生に直接的に関わった人脈、作品が掲載された諸媒体の特質、作品内容の検討という共時的な側面と、明治以来の日本による台湾表象の類型化の問題、日本統治期の台湾をめぐる人類学・民俗学の系譜、台湾における「国語」としての日本語普及運動の展開という通時的な側面の両面から黄氏鳳姿の作品を位置づけることを目的にしている。

「はじめに」において、従来の黄氏鳳姿研究の問題点を整理し、ポストコロニアリズム的な視点の導入を通して本論文の方法と目的が示された。

I 章「黄氏鳳姿のデビューをめぐる」では、黄氏鳳姿の生い立ちや家庭環境とデビューの背景にある公学校における綴方教育の問題と鳳姿を見出したクラスの受け持ち担任の池田敏雄の柳田国男からの影響、および鳳姿の作品を掲載・出版した西川満の台湾時代の経歴などを中心に検討する。とくに公学校における作文＝綴方教育の実態を、公学校綴方教授の細目の提示と同時期の日本における生活綴方運動との関連性を通じて明らかにした上で、公学校の教師としての池田敏雄の植民地台湾における綴方教育の特質を探る。

II 章「黄氏鳳姿の作品の媒体の特質」では、鳳姿の作品が掲載された諸媒体の発刊の趣旨や編集方針の検証を通して、鳳姿の作品との相関関係を究明する。鳳姿のデビュー作の掲載雑誌『台湾風土記』と1940年代の台湾の主要な文芸誌『文芸台湾』は、西川満の芸術至上主義と台湾趣味的南方文学樹立の夢の実践的な場としてのみならず、総督府の皇民化運動に共鳴し、日本帝国主義の侵略に協力する性格をも備えていた。こうした共犯性は、そのまま鳳姿の作品の評価と直結していた。鳳姿の作品は、異国情緒という植民者のノスタルジアを喚起する美的な作品であり、「国語」による表現力は、十分皇民化された植民地少女としての側面を持っていた。このような西川満の台湾趣味的異国情緒の芸術的観点に対し、池田敏雄が企画した『民俗台湾』は、台湾の習俗や伝統を文化遺産として残すべきであるとする観点から、鳳姿の台湾民俗随筆を評価していた。そのような両者のスタンスの違いと共犯的な関係を明らかにしつつ、本論文は、彼らが在台日本人による日本文化の主体構成の作業にも深く関与していたことを跡付ける。

Ⅲ章「黄氏鳳姿の眼差し」では、鳳姿が描き出している台湾像を具体的に作品の内容に触れながら詳しく検討するとともに、鳳姿が内地修学旅行中台湾に発信した手紙文を糸口に、鳳姿の内地観を明らかにする。鳳姿は、彼女が育った萬華一帯の日常生活と慣習、そしてその地域に流布していた民話・伝説を「国語」で記録したが、それらの意味作用を皇民化政策との関係で分析する。一方、大東亜戦争という時局の影が鳳姿の物語世界にも濃厚に落ちている。例えば 1943 年出版の『台湾の少女』には、内地にいる父宛ての手紙文が収録されている。その内容は主に大東亜戦争下の台湾人の銃後生活を描いたもので、「祖国」のためにその赤誠を披瀝することを惜しまない台湾人の姿にほかならない。以上のような「台湾色」と台湾（人）像が、当時の南進政策・志願兵制度・改姓名運動など統治側の要請に合致することをさまざまな資料を通して傍証していく。

また鳳姿は、「国語」に翻訳不可能な「台湾語」は、漢字を借りてカタカナでルビ表記しているが、そのような文体的特長も含めて、鳳姿のクレオール的な言語実践を問題にしている。

Ⅳ章「「他者」をめぐるディスコース」では、植民者側の日本の台湾表象をめぐる言説について考察し、台湾人としての黄氏鳳姿の「国語」による創作が植民者側に歓迎された歴史的背景と経緯を解き明かす。鳳姿が登場するまでの日本統治期間の台湾は、危険、後進、停滞の場所であり、植民地統治の政治的目的を隠蔽するバーバリズム、ロマンチズム、エキゾチズム溢れる地であり、大日本帝国のために自己犠牲を惜しまない同化型共同体が想像・創造されている模範的な「南進基地」の理想郷でもあった。また鳳姿デビュー以前の 30 年代の台湾文学の様相、とりわけ台湾人女性作家の作品と 30 年代の日本文壇がその内部の転向問題で台湾文壇に対して「地方色」を求めたことにも着目する。さらに鳳姿が登場する前後の 1940 年代の台湾における文学の諸相を鳳姿の作品世界と関連付けながら検討する。こうした作業を通じて「台湾の少女」の誕生は、決して突発的で一時的な現象でないことを裏付けている。

Ⅴ章「日本植民地下の台湾民俗学の系譜」では、日本統治下の台湾における人類学・民俗学の系譜を辿りつつその性格を考察し、鳳姿の作品が戦前統治側に歓迎された背景を、台湾研究の系譜的なパースペクティブから明らかにした。日本統治期間の台湾における台湾学の発展に多大な影響を与えた日本の人類学にさかのぼるとともに、日本統治期の台湾研究を切り開いた伊能嘉矩と鳥居龍蔵の台湾人類学調査の特質を考察する。続いて日本統治下の二大民俗雑誌『台湾慣習記事』と『民俗台湾』の創刊とその性質を検討し、台湾の民俗記録的な側面を有するゆえに大東亜共栄圏の建設の一環とされた鳳姿の作品を、日本本土で展開された地方文化振興運動ならびにその運動の植民地台湾での展開と結びつけながら、「台湾の少女」の誕生との接点を通史的に明らかにする。

Ⅵ章「昭和期の台湾における「国語」普及運動」では、急進的な皇民化政策が見直される契機となった台湾先住民族による抗日霧社事件（1930 年 10 月 27 日）以降の「国語」普及運動の新たな展開に眼を向ける。大衆化をねらった唱歌による「国語」普及策や、『国光』『黎明』といった国語講習所や公学校生を対象にした「国語」普及雑誌の特質を改めて取り上げ、そうした雑誌の廃刊と前後して登場した鳳姿が「国語」普及政策の成果として脚光を浴びる過程を詳述した。

学位論文審査の要旨

主 査 助 教 授 押 野 武 志

副 査 教 授 中 山 昭 彦

副 査 助 教 授 権 錫 永

学 位 論 文 題 名

「台湾の少女」の誕生

－ 日本統治期の台湾人作家黄氏鳳姿に関する研究 －

平成 18 年 2 月 17 日開催の文学研究科教授会において、審査委員会の発足が認められた。平成 18 年 2 月 22 日に第 1 回審査委員会を開き、申請論文の配布と審査日程の調整を行った。平成 18 年 3 月 28 日に第 2 回審査委員会を開き、申請論文の内容の検討と質問事項の整理を行った。平成 18 年 3 月 28 日に第 3 回審査委員会を開き、口述試験を実施した。口述試験終了後、ただちに学位授与可否の判定を行った。以下のような理由により本審査委員会は、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。

本論文が特に着目するのは、黄氏鳳姿が登場する前後の台湾における皇民化政策の中でも「国語」普及の諸相である。「大東亜共栄圏」構想内の「外地」であった台湾における「国語」政策の展開を中心にして、「国語」普及のプロパガンダとして利用された側面をもつ黄氏鳳姿の「国語」による創作がいかなる言説との相互作用・葛藤の中から生じたのかという時代的な要請の実態がこれにより明らかにされた。

本論文の第一の研究成果は、「国語」で創作された黄氏鳳姿の作品を日本統治期における台湾の文学・文化状況のみならず、日本の文学・文化状況との連動性において分析することで、当時喧伝されていた「外地文学」「地方文学」の実態とその問題点を具体的に明らかにした点にある。第二の成果としては、「台湾の少女」黄氏鳳姿を生み出した歴史的な背後とその受容のプロセスを詳細に分析することで、さまざまな皇民化・言語・教育政策の実態とその変容のプロセスを動態的に記述することに成功している点が挙げられる。

ただし、問題がないわけではない。台湾内部の地域差や先住民族と黄氏鳳姿のような中国福建省などから渡来してきた漢族系の台湾人に対する皇民化政策との差異や温度差などに対する考察は十分とは言えない。また、黄氏鳳姿が語る台湾の民俗・慣習は、漢族系の台湾人のアイデンティティの拠り所になり、皇民化運動と抵触しかねない矛盾を孕んでいるという指摘、あるいは柳田国男を媒介にして、池田敏雄と黄氏鳳姿の作品との関係を金田一京助と知里幸恵の『アイヌ神謡集』との関係と対比させているところなどは重要な指摘でありながらも、これもまた十分に論証しているとはいえない部分もある。

しかし上の二つの成果にあるように、日本統治期の台湾・日本文学史、言語政策・教育史、民俗学史の再構築にもつながる有機的で多層的な研究であり、多くの新しい視点を提示した研究として、高い水準に達しているものと評価することができる。

以上のような審査結果を踏まえ、平成 18 年 4 月 5 日に第 4 回審査委員会を開き、審査結果報告書を

検討し作成した。平成18年4月6日に審査結果報告書を提出し、平成18年4月14日開催の研究科教授会において審査報告を行った。平成18年5月12日開催の研究科教授会において審査についての可否投票が行われ、劉淑如氏に対する学位授与が承認された。